

# 弦楽器職人の矜持

母国ベルギーでものづくりに魅せられ、弦楽器職人の道を選んだフィリップ・クイケンさん。15年前、家族で加須市に移り住み、自宅兼工房で製作活動に打ち込む、職人の思いを取材した。



バイオリンの仕上がりを確認するクイケンさん。オーダーメイドの楽器製作から、修理まで行っている

## 15歳で職人の道を志し結婚を機に日本へ移住

田畑の広がる加須市に工房を持つ、フィリップ・クイケンさん。バイオリンやピアノ、チェロの製作や修理を行う、弦楽器職人だ。1969年、ベルギーで生まれたクイケンさんは、バロック時代に人気を博した弦楽器、ピアノ・ダ・ガンバや、チェロの世界的奏者である父親のヴィラント・クイケンさんを中心とする、音楽一家で育つ。しかし、幼少期から演奏よりも、ものづくりに興味をもったクイケンさんは、15歳で弦楽器職人を志す。中等教育機関で学ぶかたわら、専門学校でバイオリン製作を基礎から学んだ。

その後研鑽を積み、24歳で独り立ち。父親の弟子だった日本人奏

Filip Kuijken  
フィリップ・クイケンさん  
1969年、ベルギー出身。15歳で弦楽器職人を志し、1994年に楽器を納品するため日本へ初来日。1999年、日本人女性との結婚を機に日本へ移住。2005年、加須市割目に自宅兼工房を構える



者の紹介で、日本の学生や演奏者から楽器の注文を受けるようになる。1999年、楽器を購入してくれた日本人女性との結婚を機に、東京へ移住。その丁寧な仕事ぶりが口コミで広がり、少しずつ仕事も軌道に乗り始めた。

2人の子宝に恵まれ、仕事も軌道に乗ったクイケンさん家族に転機が訪れたのは2005年。子どもたちの成長に伴い、都内の自宅兼工房が手狭になったため、埼玉県郊外に転居したのだ。

「結婚当初は、はじめの5年間は日本で過ごし、ベルギーに戻ろうと考えていました」と、クイケンさんは振り返る。しかし、日本生まれの子どもたちは、ベルギー

軌跡には、細心の注意を払う。

1台の楽器を仕上げるまで、バイオリンは約2カ月、チェロなら4カ月は有する。弦の調節をする糸巻きなどの細かなパーツ以外は、全て一人で作っているからだ。同じように作っても、どんな音を奏でるのは、弾いてみるまで分かりません」とクイケンさん。だからこそ、仕事は奥深く、楽しいのだとほほ笑んだ。

移住から21年。さまざまな試練を乗り越え、自分の信じる道を進んできた。「これからもずっと、好きな仕事を続けていきたい」とクイケンさんは前を見据える。

木と向き合い、楽器に命を吹き込む職人の誇り。強い志がある限り、ものづくりへの飽くなき探究心は、色あせない。

の言葉を全く話せない。クイケンさんと妻の仕事基盤も日本に根付いているため、異国の故郷に移住するには、あまりにリスクが大きすぎるといふ決断に至った。

田畑に囲まれたこの場所は、どことなく生まれ育ったベルギーの首都ブリュッセル郊外の田舎町に風景が似ている。「広々とした環境でゆったりと過ごせるのが、移住を決めた大きな理由です」とクイケンさんは話す。

630坪の広い敷地には、母屋の他に農機具置き場として使われていた納屋がある。コンクリートで基礎を固められた納屋は地熱や湿気を遮断し、デリケートな楽器を扱うにもぴったりだ。もともと手先の器用なクイケンさんは、自身の手で工房に改装。子育て

てを楽しみながら、のびのびと製作活動に打ち込める環境を手に入れた。

東京にも程近い、理想的な場所で新たな暮らしをスタートさせたクイケンさん一家。次第に周囲の人々とも溶け込み、加須のまちにしっかりと根付いていくのである。

## 木と対話するように弦楽器づくりと向き合う

クイケンさんの楽器づくりは、原材料の木材選びから始める。買付け先は、主にヨーロッパで、標高の高いアルプスで生育した楓や松をまとめて仕入れる。寒い地方でゆっくり育った木は、年輪の幅が狭く、木目が美しい。温かい場所で急速に育った木と比べ

ると、音の響きも全く違うそうだ。その中からできるだけ長い時間をかけて自然乾燥させた木を選び、依頼主の意向やパーツによって、種類も使い分ける。

横板、表板、裏板、ネックなど、ブロックごとの切り出しに電動ノコギリを使うものの、楽器の製作工程はほぼ手作業だ。大まかな部分を削る際はヨーロッパ製のカンナを使い、日本製のカンナやノミ、紙やすりで整える。細かい

部分を削る際は、長さ2センチ程の小さなカンナも使う。一枚の木でも場所によって硬さが微妙に異なり、それに合わせて厚みや削り方を調整しなければならぬからだ。

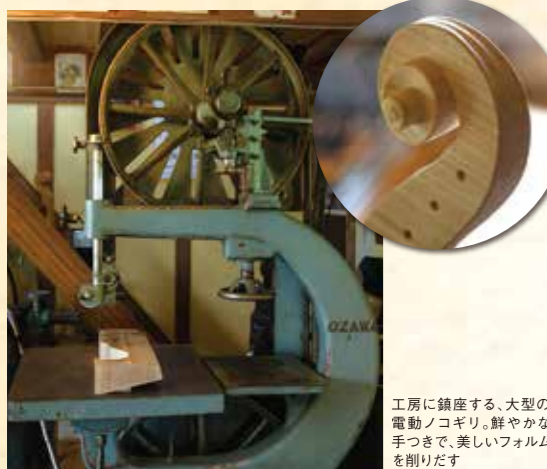
また、木材は気温や湿度によって収縮・膨張するという性質上、

工房内の温湿度管理も大切な仕事である。特に湿度の低い冬場は木材の水分が蒸発・乾燥し、木割れの原因となる。クイケンさんは、工房の3カ所に温湿度計を配置し、24時間加湿を行う。その一方、暑さの厳しい夏は、ニスが溶けるため、塗りの作業はできない。自然や木の変化を肌で感じながら、作業工程や最善の手法を選ぶのが、職人の腕の見せ所だ。

楽器製作のなかで、クイケンさんが最も好きな工程は、演奏者が直接手に持つ部分のネックづくり。なかでも、弦楽器の頭部に位置する渦巻き型のスクロールは、職人の個性や腕前が如実に現れるパーツだ。楽器の美しさを左右する大きな要素のひとつだけに、滑らかなカーブを描く渦巻きの



クイケンさんの作ったバイオリン。現代楽器から、古楽器の製作まで手掛ける



工房に鎮座する、大型の電動ノコギリ。鮮やかな手つきで、美しいフォルムを削りだす



弦楽器づくりに欠かせない工具。削る場所や用途に合わせて使い分ける

## 弦楽器製作・修理 フィリップ・クイケン

問合せ

E-Mail: filip@kuijkenviolins.com

フリモARアプリをダウンロード

App Store からダウンロード Google Play で「フリモAR」を検索

※AppleおよびAppleロゴは米国その他で登録されたApple Inc. の商標です。App Store®はApple Inc. のサービスマークです。※Google Play および Google Play ロゴは Google Inc. の商標です